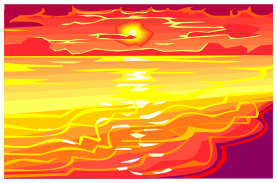
学校だより 第16号

平成２３年１０月１１日（火）
発行者：新宿区立
新宿西戸山中学校

校歌まだ歌えるふしぎ秋夕焼（渡邊禎子）
灯火親し英語話せる火星人（小川軽舟）
柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺（正岡子規）
柿が好き丸ごとが好き子規が好き（小川千子）

今日の日の出の時刻は午前５時46分、日の入りの時刻は午後５時８分です。秋の日は「釣瓶(つるべ)落とし」と言いますが、本当に早くなったと感じます。秋の夕焼け空には様々な思いが交錯します。



母校の校歌が自然と口を衝いて出るのも秋の夕暮れ時のマジックなのでしょうか。秋の夜長は「灯火親しむ」学習に最も適した季節です。私の中学生時代は、英語を自由に話すことのできる人など身の回りにほとんどいなく、そうした特別な人はどういう訳か「火星人」（決して馬鹿にしたり、差別したりする意味ではなく、一種尊敬の意味も込めて）呼ばれていたような気がします。でも、現代はグローバリゼーションの時代。外国語の１つや２つ、自由に操れなければ世界に伍して生きていくことができません。近い将来、英語を話せない人こそそのように呼ばれるようになるのかもしれません。

「柿」と言えば「正岡子規」、「正岡子規」と言えばこの法隆寺の句といわれるほど有名です。子規ほど多くの人々から愛され続けている俳人はいないのかもしれません。柿を食べながら子規の句を詠じるのも芸術の秋にふさわしい作法ではないでしょうか。

【法隆寺『夢殿』】

【本校の教育目標】

人間尊重の精神を基盤として、感謝と畏敬の念をもち、伝統文化を継承し、世界的視野に立って新しい社会・文化を創造する人間の育成を目指す。

○教養と品格を磨き、心身ともに自らを鍛える生徒〔鍛錬〕
○豊かな人間性や社会性を身に付け、自ら進んで社会に参画する生徒〔参画〕
○夢や希望の実現を目指し、自らの可能性を信じて挑戦する生徒〔飛躍〕

全国中学生人権作文コンテスト
1名が新宿区代表に　2名が入賞

夏休み中の課題として全校生徒が取り組んだ「全国中学校人権作文コンテスト」において、３ＡのＳＵさんの作品『心の差別』が、見事新宿区代表に選ばれ、東京都大会に推薦されました。また、３ＢのMHさんの『人と話せなくて』と、２ＢのＳＭさんの『原子力発電所で働く作業員』がそれぞれ入賞しました。

今号で、ＳＵさんの作文を紹介します。「心の差別」をなくすためには、一人ひとりが何をなすべきか一緒に考えたいと思います。

『心の差別』

３月11日金曜日。あの東北関東大震災が起こった日。あの日以来、大きな被害を受けていない私達こそ手を差し延べなければならないのに・・・。

支援物資集めに義援金集め。日本各地で様々な活動が行われていました。テレビをつければ、東北の人達に向けた励ましや呼びかけ、芸能人による支援活動の報道などがされていて、日本が一つになったような気がしました。その中で、私達の学校でも義援金集めが行われました。私は生徒会

本部役員の一員としてその運営に携わりましたが、誰もがやる気でいっぱい。さらに、生徒会役員だけでなく、全校生徒のみんなもたくさん協力してくれたため、普段行う募金活動よりも募集期間が短かったにも関わらず、２倍以上のお金が集まったのです。これは、あの日、自分達も少なくとも大きな地震にあったので実感がわくというのと、何とかして東北の人達を助けたい、という一人ひとりの思いの表れだったのだと思います。そして、私たちの学校だけではなく、日本中の人達がそういう思いでいたでしょう。だからこそ、たくさんの義援金や支援物資が集まったのだと思うのです。

しかし、そういう物的な支援ばかりでいいのでしょうか。というより、それ以外は何もできていないし、逆に被災者の方々を悲しませるようなことをしているのではないかと思います。それが「風評被害」です。

「福島県やその隣県産の物は買わない。」これが支援になるのでしょうか。確かに、地震に伴って起きた原発事故の影響で、被害を受けた農作物があるのは事実です。それでも、売り場に出ているものは、被害を受けていない安全なものばかりです。それをわかっているはずなのに、産地を見ただけでなぜか手を引いてしまう。これは一種の差別、心の差別だと思います。物的な支援もすごく大事です。でも、こういう心の差別をされて、本当に被災地の方々が喜んでくれるとは思えません。様々な物資のおかげで何とか生活できるようになっても、そういう現状があると知れば、心は晴れやかにならないはずです。

さらに、心の差別はそれだけではありません。家があっても、原発の近くに住む方々は移住を強制され、やむなく他県に移転してくる。そういう人たちが今もたくさんいます。この人達はきっと、心に大きな傷を負い、さらには本当は移転したくないという思いでいっぱいだと思います。だからこそ、そういう人が自分の周りにいたら、普通に楽しく接していかなければならないはずです。それなのに、学校に来た子に向かって、「放射能が移る」などと言って、その子に悲しい思いをさせたという話を聞きました。どうしようもない状況で、何かにすがる思いで移転してきている子に向かって、そういう心ないことを言うのは、その子を救うどころかさらに傷を負わせてしまっているだけだと思います。自分だってなりたくてなったわけじゃないのに、被災者というだけでされてしまう差別。こんな差別がある以上、どんなに環境が整っても被災地の人達が気持よく生活できる日々はこないでしょう。

日本がこういう状況の中で、世界中の人達は、日本を、東北を応援してくださっています。それを痛感したのは、日本ユニセフ協会に行った時でした。その日は、震災とは別の要件で行きました。世界中の援助を必要としているたくさんの国々の現状を知って、改めて日本が本当に恵まれているということを実感していました。そんな時、『マリ』という国の大使館の人だという方がいらしていて、何かの前で写真を撮っておられました。その何かというのは、なんとマリの国の子供達の描いた福島向けの絵だったのです。そこには、上と下にたくさんの人達が手をつないでいる光景が描かれていました。マリという国は、世界の中で最も援助を必要としている国の一つです。日本よりも人口が少ないのに、５歳まで生きられない子は日本の何十倍もいるといいます。そんな辛い環境にいる子達が、今回の地震で被害にあった福島の人達のことを心配して絵を贈ってくれたのです。自分達だって本当は辛いはずなのに、福島のことを思って一生懸命描いてくれたのです。

私達よりも辛い環境にいる人達がこんなにも東北のことを思ってくださっているのに、同じ日本人が心の差別をしていていいのでしょうか。同じ日本人だからこそ、東北の人達を心から支えていかなければならないのではないでしょうか。そのためには、一人ひとりの心の改革が必要です。今からでも遅くないでしょう。むしろ、支援活動はまだ終わらせてはいけないはずです。

東北の人達が笑顔で暮らせるようになるために一番必要なこと、それは、『心の差別』をなくし、日本中の人々が『心の支え』になることだと思うのです。